

Title	三田哲学と私(3)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	中山, 浩二郎(Nakayama, Kojiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.59- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三 田 哲 学 と 私

名 誉 教 授 中 山 浩 二 郎

私の手もとに保存されている「哲学」の最初のもは、1951年8月に復刊第1輯として刊行された第27輯である。巻頭の橋本孝先生の復刊の辞について、松本正夫「価値論理の所属範疇への基礎付け」、井筒俊彦「神秘主義のエロスの形態——聖ベルナル論——」、沢田允茂「デカルトと実存——実存的思惟の本質及び歴史に関する研究——」、神山四郎「ボナベントウラの類比的直観」、横山寧夫「浪漫主義と敬虔主義」、村井 実「ルソーの自然概念について」、印東太郎「アイソモルフィズムの問題——知覚された点の位置について——」等の諸先生が執筆されている。用紙の質こそ仙花紙というすき返しの粗末な紙だが和文 242 頁、欧文 13 頁の堂々たる本である。

「あらゆるものを破壊し奪い去る貪欲飽くなき戦争と雖も、われらの胸奥に深く根ざす真理思慕の念を根絶する訳には行かなかった。戦中戦後を通じて断続していたわれわれの研究活動は、恰も灰燼の中から飛び立つフェニックスの如く、…、幸い同人諸君の異常な努力によって、ここに機関紙「哲学」の復刊を見た」と復刊の辞に語られているように、暗く長い戦争期をしのぎ切った研究者の歓びがどの論文にも漲っている。

1951年というこの年は、旧制大学予科三年を終了して、新制大学三年に移行入学した私が、第一期生として学部を卒業し、これまた新設の大学院修士過程に進んだ年であった。

1958年11月慶應義塾は、福沢先生が築地鉄砲州の奥平藩中屋敷に蘭学塾を開かれてから満百年に当たるのを記念して、社中挙げての盛大な記念式典を挙行した。三田哲学会もそれに呼応して、和文 685 頁、欧文 32 頁

の記念論文集を編集刊行したが、それには哲学、倫理、教育、社会、心理の五専攻のスタッフの殆ど全員が顔を揃えている。美学美術史学専攻の名がないのは、私の記憶では、同時に記念論文集を出した「芸文」のほうに書かれたのではないかと思う。

松本正夫、務合理作、山本万二郎、橋本孝、宮崎友愛、三雲夏生、小林澄兄、中山一義、西谷謙堂、山本敏夫、有賀喜左衛門、佐原六郎、横山松三郎等々の、三田哲学会発展のために、それぞれの立場で尽力された懐かしい先生方のお名前がずらりと並んでいる。私も初めて先生方の驥尾に付して小論を出させて頂いたが、そのとき指導教授だった松本先生が「三田哲の「哲学」は全国規模の機関誌と同等の権威を持っている。これに論文を出すことは日本哲学会の機関誌に出すのと同じ評価を受けるのだよ」と言われたことが、今も鮮明に記憶に残っている。

哲学科から人間関係学科まで幅広い範囲の各専攻の多彩なスタッフが、一つの機関誌「哲学」に結集していることは、他の大学に例を見ない素晴らしい特徴であり、この特徴を生かしつつ、今後の更なる発展を期待したいと思う。